

マレーシア国日本語教師隊員巡回指導調査報告書

No. 1

マレーシア国 日本語教師隊員 巡回指導調査報告書

平成9年2月

JICA LIBRARY

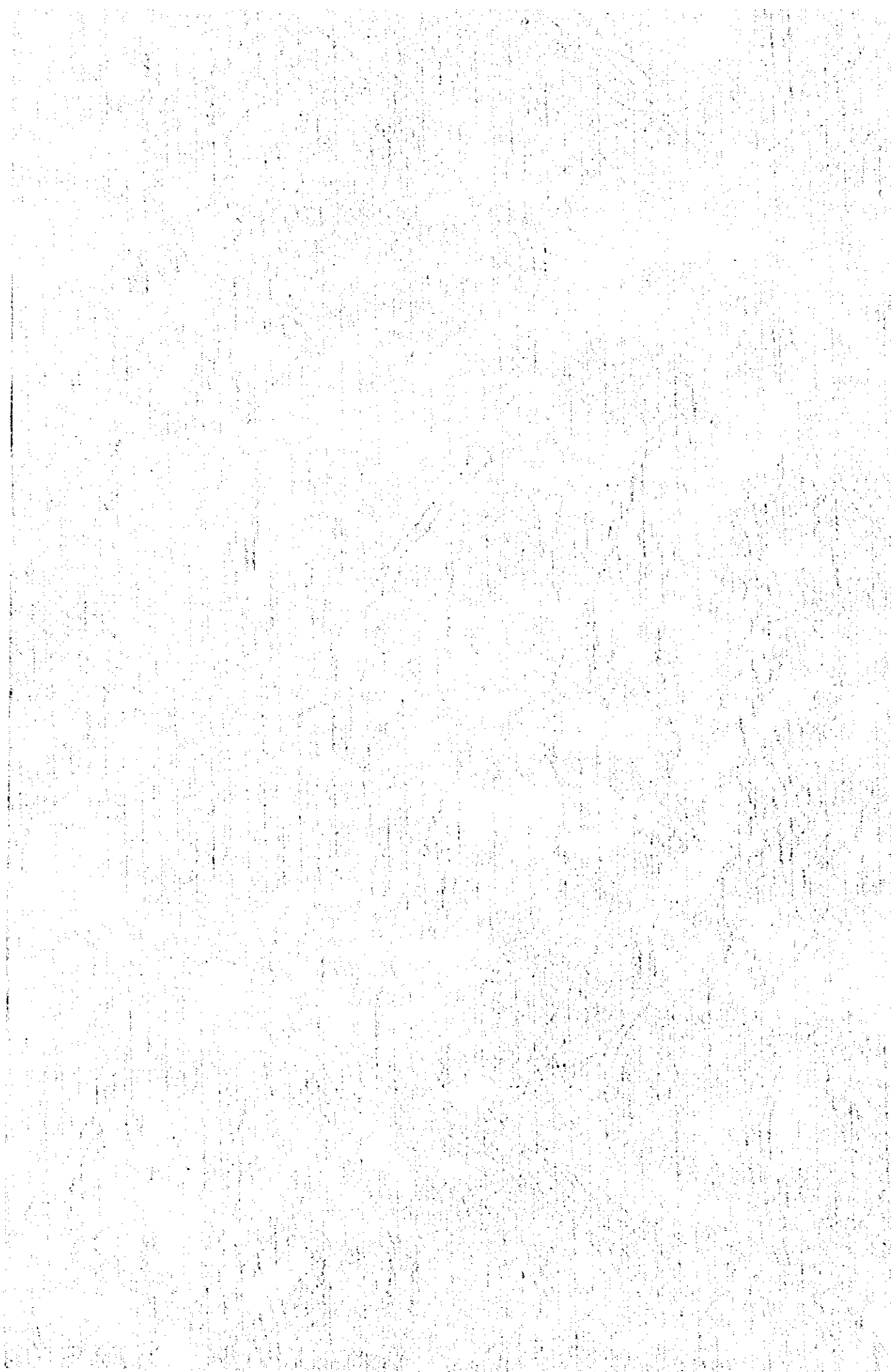


J 1140099 [1]

国際協力事業団
青年海外協力隊事務局

青 派
J R
96-12

JICA
LIBRARY
113
165
JYO
LIBRARY



序

青年海外協力隊事業は発足以来30年を経過し、隊員派遣累計は、平成8年末現在で、のべ、16,500人を超えており、日本語教師に対する近年の要請増加は目を見張るものがあります。

マレーシア国教育省レジデンシャルスクール(以下RS)に対する日本語教師隊員派遣は、マハティール首相が協力に推進した東方政策の一環として1984年に開始され、現在に至るまで12年間協力を続けてきました。東方政策は日本や韓国から技術を習得し、国家の発展に寄与しようという考えで、そのための日本語の習得が重視されています。協力隊日本語教師をRSという中高等教育機関に配置することにより、日本に興味を抱き、日本語を理解する人材を育成することを大きな目的としています。

これまでにマレーシア人の日本語教師はその数が限られており、協力隊員にとってはカウンターパートがいない状況が続いてきました。しかし、1995年4月からは、日本留学を修了して帰国したマレーシア人の日本語教師が、協力隊員の配属先であるRS配属され、隊員と共同で日本語教育を行っていくことになりました。

本調査は、日本人が主導する日本語教育からマレーシア人による日本語教育への過渡期にあたり、より円滑な隊員活動を推進するため、および、協力隊員の活動の視察や関係者との協議をもとに、今後の協力隊員の派遣に係る方針を検討するために実施しました。

本報告書が、広く関係者に活用されることを願うとともに、今回の調査にご協力いただいたマレーシア国関係者各位に対し深く感謝の意を表します。

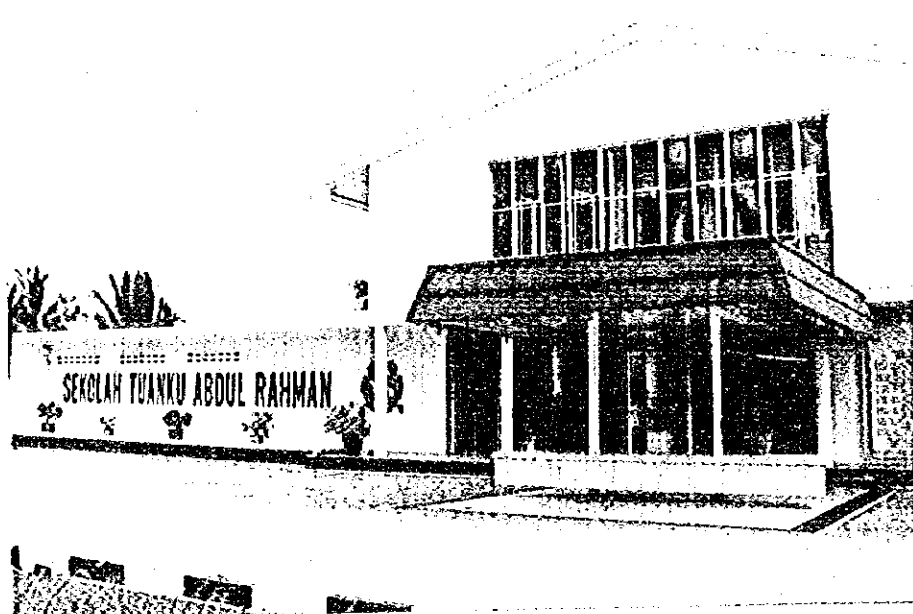
平成9年2月

国際協力事業団
青年海外協力隊事務局

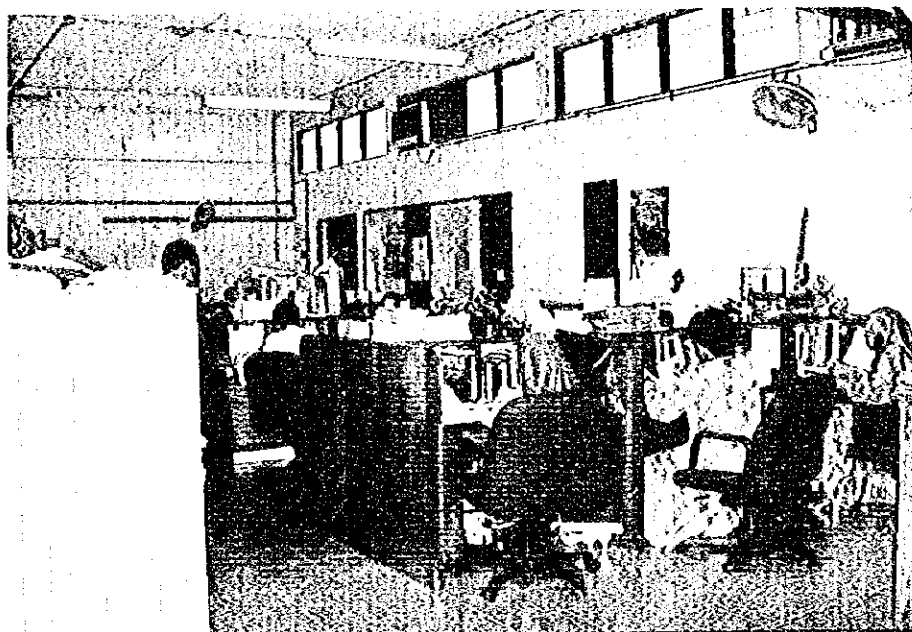
事務局長 高橋 昭



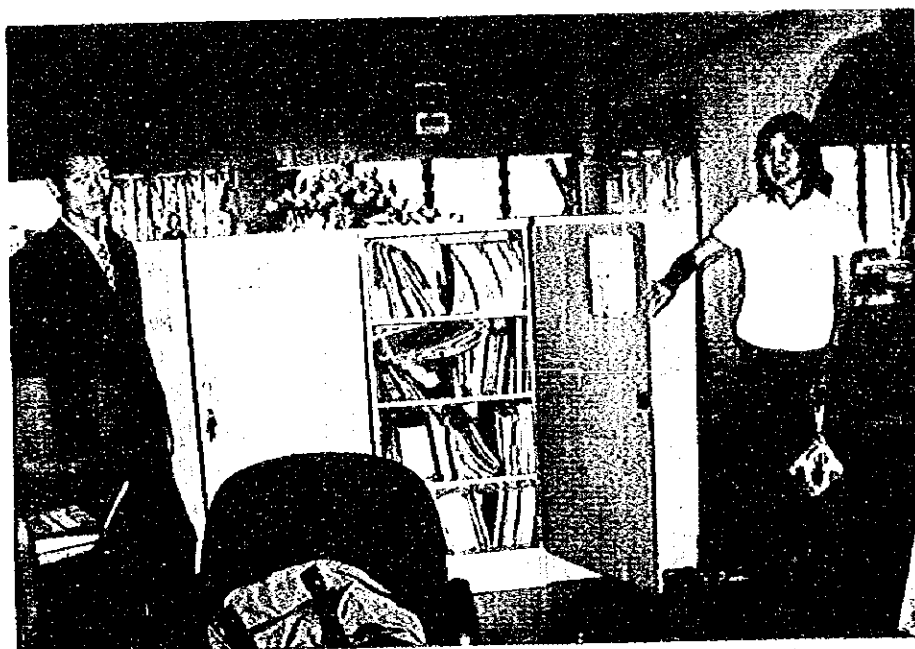
STAR 校外観



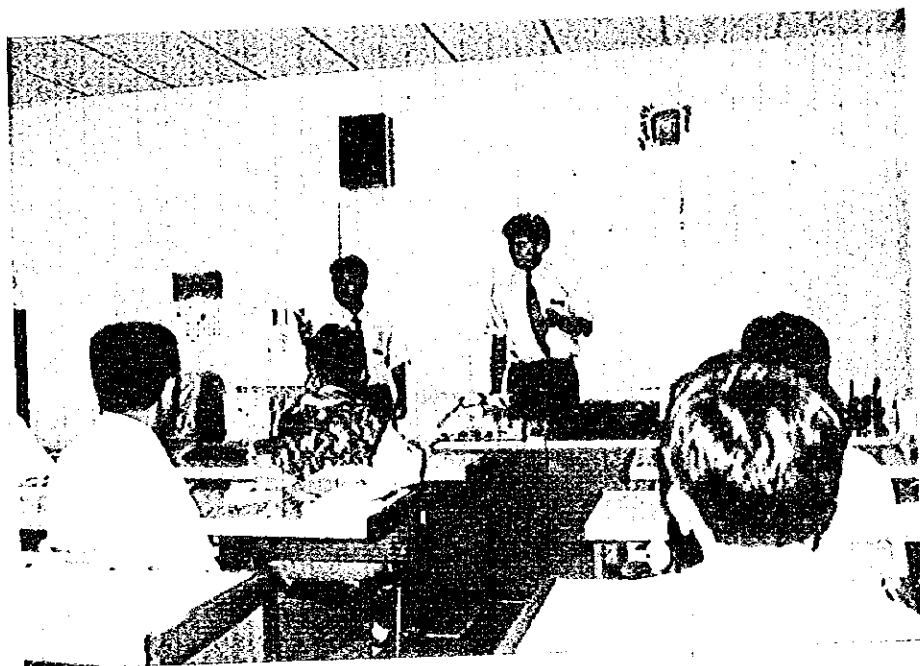
職員室



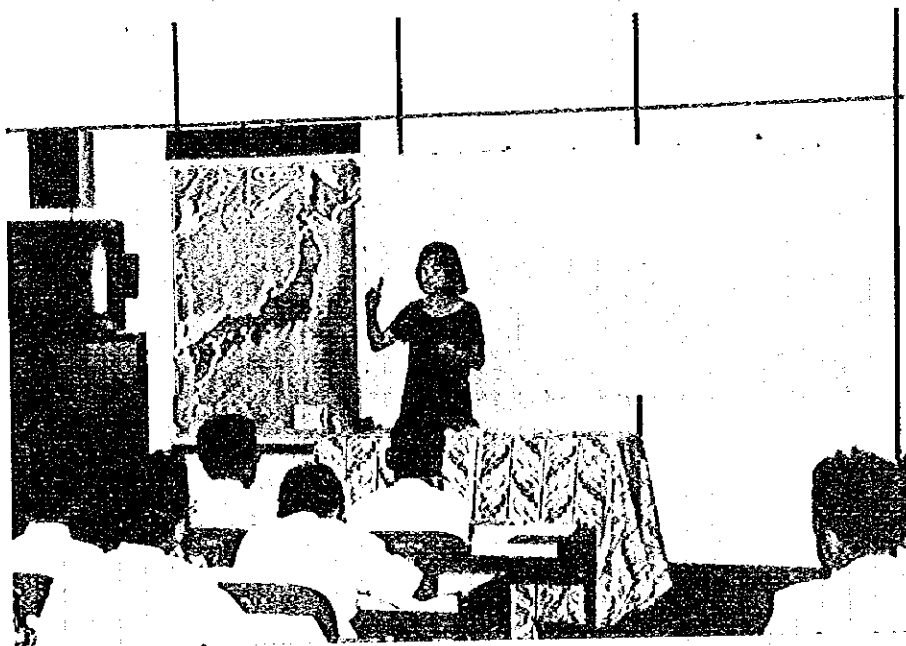
教材用の棚



授業の様子



授業の様子



授業の様子



マレーシア日本語教師隊員巡回指導調査 報告書

目 次

1 調査団の派遣について

- (1) 背景・経緯
- (2) 調査の目的
- (3) 調査項目
- (4) 調査行程
- (5) 調査団員

2 調査結果の概要

- (1) 調査の概要
- (2) 隊員の活動状況
- (3) マレーシアにおける日本語教育について
- (4) 教育省との協議について
- (5) 今後のとり進め方

3 隊員の活動状況

- (1) 訪問校について
- (2) 隊員の活動状況
- (3) 今後の課題
- (4) まとめ

4 アンケートの結果

- (1) 訪問校について
- (2) 隊員の活動状況
- (3) 今後の課題
- (4) まとめ

資料：隊員配置図

隊員派遣計画

1 調査団派遣について

(1) 背景・経緯

1) マレーシア国教育省全寮制学校 (以下RS) に対する日本語教師隊員の派遣は東方正策支援の一環として1984年に33校あるRSのうち2校のみを対象として開始された。隊員による活動の目的が日本留学という高いレベルに設定されていたが、中等教育レベルへの日本語教育の正式な導入は初の試みであり、カリキュラムや教材も無く、マレーシア人日本語教師も不在の状態であったため、隊員自身が主導して日本語教育を実施してきた。

1996年9月現在、RS11校に各2名あるいは1名の隊員を派遣している。また、業務を総括するシニア隊員を本年9月まで1名派遣していた。

2) マレーシア政府のプログラムにより日本留学をしていたマレーシア人教師が帰国し、RSに配属される事態に備え、1995年8月に調査団を派遣して、教育省と帰国後のマレーシア人教師の配置計画について協議した結果、隊員派遣先の8校を優先して配置すること、将来的には20校のRSを目処として2名ずつ配置することが確認された。

3) しかし、1996年4月の初のマレーシア人教師の配置は計画通り行われず、複数のマレーシア人教師が配属されるRSと全く配置されないRSが出現した。その結果、派遣中及び派遣予定の隊員の配置を見直す必要が生じた。

また、今後計100名弱のマレーシア人教師が帰国して日本語教育に携わる見込みであることから、日本語教師協力隊員の活動環境は転換期に差し掛かっていると捉えられる。

(2) 調査の目的

- 1) 今後の日本語教師隊員の派遣に係る中期的方針をマレーシア国教育省と協議する。
- 2) 新規協力対象校における立ち上げ業務や、マレーシア人教師と協力して行う授業や教室運営に係る技術指導を行う。

(3) 調査項目

- 1) 各隊員の活動現場を視察し、活動進捗状況、問題点等を隊員より聴取し、技術的な指導を行う。あわせて配属先の責任者からも活動の進捗状況等についての意見を聴取する。調査対象校 (所在地) は以下の通り。(配置図参照)

SMSAH 校(JITRA)	KTK 校(SEREMBAN)
KMKK 校(K. KANGSAR)	STF 校(JOHOR BARU)
STAR 校(IPOH)	SDAR 校(SEREMBAN)
SAS 校(KL)	SSP 校(KL)

- 2) 交流基金派遣の専門家やシニア海外ボランティア（日本語教師／教師育成）の活動との関係について聴取する。
- 3) マレーシア教育省より今後の日本語教育に係る方針やマレーシア人教師配置の計画等につき聴取する。
- 4) マレーシア側に日本語教師隊員の派遣に係る方針及び現状につき説明、理解を得る。
- 5) 上記の調査結果を基に関係者間で検討し、派遣計画の素案を作成する。
- 6) 今後のシニア隊員の派遣につき関係者と協議し業務内容に反映させる。

(4) 調査行程 別紙の通り。

(5) 調査団員

- (1) 総括／日本語教育Ⅰ：伊勢田 涼子（東京水産大学 教授）
- (2) 日本語教育Ⅱ：坪山 由美子（国際交流基金 日本語国際センター専任講師）
- (3) 協力計画：宮脇 摂（青年海外協力隊事務局 派遣第1課）

調査行程案

	日付	行程	調査事項等	坪山	伊勢田	宮脇
1	9月 8日 (日)	(移動日)	JL723(13:10 発 19:20 着)	TKY ↓ KL		
2	9月 9日 (月)	SAS 訪問	隊員活動状況 受入状況	↓		
3	9月10日 (火)	事務所との打ち合わせ STAR 訪問	隊員活動状況 受入状況	1POH		
4	9月11日 (水)	KMKK 訪問	隊員活動状況 受入状況	↓ Kkan		
5	9月12日 (木)	SMSAH 訪問	隊員活動状況 受入状況	↓ AS		
6	9月13日 (金)	SSP 訪問	隊員活動状況 受入状況	↓ KL		
7	9月14日 (土)	日本語教師会議(KL) 団長主催懇親会	SSP 日本語教師会議 TG415 (8:40 発 11:40 着) JL723 (13:10 発 19:20 着)	↓	BKK ↓ KL	TKY ↓ KL
8	9月15日 (日)	移動	移動/調査団打合せ	↓ JB	↓ JB	↓ JB
9	9月16日 (月)	STF 訪問 (ジョホールバル)	隊員活動状況 受入状況	↓ KL	↓ KL	↓ KL
10	9月17日 (火)	KTK 訪問 (スレンバン)	隊員活動状況 受入状況	↓ SREM BAN	↓ SREM BAN	↓ SREM BAN
11	9月18日 (水)	SDAR (スレンバン) 事務所への報告	隊員活動状況/受入状況 依頼事項等の伝達	↓ KL	↓ KL	↓ KL
12	9月19日 (木)	教育省との協議 国際交流基金表敬 マラ大学語学センター訪問	教育省の方針について聴取 派遣計画素案の見直し JL724 (22:45 発)	KL 発	↓	↓
13	9月20日 (金)	大使館への報告	調査結果のとりまとめ	TKY 着	↓	↓
14	9月21日 (土)	資料整理	資料整理/隊員との懇談 JL724 (22:45 発)		KL 発	KL 発
15	9月22日 (日)	(移動日)			↓ TKY 着	KK
16	9月23日 (月)	コタキナバル→タワウ	隊員活動状況の視察			タワウ
17	9月24日 (火)	コタキナバル	隊員活動状況の視察 帰国			KK
18	9月25日 (水)	(移動日)	MH078 (13:10 発 19:30 着)			TKY 着

2. 調査結果の概要

(1) 調査の概要

本調査団は、協力隊員（日本語教師）が活動している全寮制中高等学校（RS）のうち、協力隊員とマレーシア人教師が共に配属されている8つの学校（SAS, STAR, KMKK, SMSAH, SSP, STF, KTK, SDAR）を訪問し、協力隊員及びマレーシア人教師による授業を参観の上、個別に技術指導を実施した。その後、教育省学校局を訪問し、本調査の結果概要を報告するとともに、教育省側の今後の日本語教育やマレーシア人教師の配置に係る方針を確認した。また、在マ日本大使館及びマレーシア事務所にも調査結果を報告した。

(2) 隊員の活動状況

マレーシアへの日本語教師隊員（当時はジュニア・エキスパート）の派遣開始は1964年である。中高等学校における外国語教育の一環として日本語教育が開始されたのは1984年で、RSへの協力隊員の派遣もその年に始まった。その後、当初6校であった派遣先のRSの数が拡大し、カリキュラム編成や教材を作成するなど日本側関係者が中心となって主導的にとり進めて来ている。

その活動環境に大きな変化をもたらしたのは、中高等日本語教育へのマレーシア人教師の登場である、1994年4月に留学先の日本からマレーシア人教師が帰国してRSに配属され始め、現在、協力隊員が配属されている13校のRSのうち、マレーシア人教師も配属されているRSは9校ある。

マレーシア人教師たちは、日本語を専攻し帰国したばかりで日本語の運用能力も高い上に、日本に派遣される以前に教師経験を有する教師もあり、クラス運営技術も概して高い。現在は、マレーシア人教師が2名配属されているRSと1名配属されているRSがあり、一つの学年で日本語の能力別にクラス編成を行い、クラス単位で分担して担当しているケースがほとんどである。現時点では、隊員とマレーシア人教師が授業を共同で行う、教案を共同で検討・作成し、共有する、研究授業などの活動は行われていない。共通のカリキュラムを使用しているにも関わらず、上述のような活動は隊員間でも頻繁に行われていない。まずは、同じ学校内や近隣の学校を訪問するなどして相互に検討するなどの活動を促進することが肝要である。

(3) マレーシアにおける日本語教育について

マレーシア政府の「東方政策」の一環として、日本留学を目標として打ち出した日本語教育が開始されて以降、約12年が経過して日本語教育が各校に定着していることは、協力隊員活動の成果と考えられる。

一方、マレーシア人教師の帰国、国際交流基金日本語センターや特にマラヤ大学における日本に関する研究・教育機能が付加されるなどの環境の変化を踏まえ、中高等教育における外国語教育の位置付けについては再考し、改編していくことが可能な時期と言える。それに

応じたカリキュラム、日本語教師会議の在り方などについても必要に応じて見直すなどの検討が必要と思われる。

(4) 教育省との協議について

教育省は、調査団から今後日本より帰国する多数のマレーシア人教師の配属に係る方針に関する質問に対し、RSの他に一般の通学校を対象として検討していること、また、マレーシア人教師のみならず、日本語のネイティブスピーカーが教育現場に常駐し、協力して指導にあたることが望ましいとの考えを示した。

また、日本語教師会議の在り方や「日本文化の日」の行事についても開催期間を延ばすなどの改善案を提示し、協力隊員とマレーシア人教師が共同で作業を行う過程と、それによって生じる相互理解や授業等の質の向上を重視している旨強調した。

(5) 今後のとり進め方

1) 別添の派遣計画表の内容に基づき平成8～9年度の募集・選考及び派遣を行う。派遣隊員数の大幅な増減は想定していない。ただし、新たに帰国するマレーシア人教師の配属先によっては、日本語を学習する学生や授業の数により、隊員の配属先等の変更などの調整の必要が生じる可能性がある。なお、新規に協力隊員が活動を開始する学校にはマレーシアでの活動経験のある隊員を配置するなど、可能な限り配慮することが望ましい。

2) マレーシア人教師とネイティブスピーカーの組み合わせによる日本語教育の実施という方針で教育省との見解は一致しており、今後も各RSに対する協力隊員の派遣による成果が発現すると思われる。しかし、教育省の提示した一般の通学校において日本語教育を開始した場合の隊員の派遣要請については、実施方針や受入体制を十分に確認し、派遣の効果を見極める必要がある。

今後は、マレーシア人の教師を、技術を移転するカウンターパートという位置付けではなく、同じ職場で協力して働く同僚として認識することが円滑な業務の基礎となるであろう。

3) マレーシア人の日本語教師は、マレーシア政府のプログラムにより日本に派遣され、日本語教授法等について日本の大学で4年間学習して修了し、帰国後RSに配属されている。このように長期間、100名近い日本語教師を育成するプログラムを実施している例は他になく、今後はRSが自国教師とネイティブスピーカーによる外国語教育の場となっていくと考えられる。

それにともない、授業運営等もマレーシア人教師による主導に移行し、協力隊員の役割は補佐的な側面を強め、ネイティブスピーカーとしての存在意義が高まって来ると予想される。活動中および今後派遣される協力隊員はこの点に十分留意し、マレーシア人教師と協力体制を確立していくことが期待される。

4) 今後の協力活動に関し、新規に日本語教育を開始する学校における1代目隊員の活動と、マレーシア人教師が帰国し配属先で協力隊員とともに教壇に立つ場合について、各学校の体制や配属されている個々の教員の状況に応じた細かな技術支援が必要と考える。

また、現地においては、国際交流基金日本語センターやマラヤ大学等との関係を深め、セミナーやワークショップなどの実施を通して技術的な支援を受けることによる高い効果が期待できる。

3. 隊員の活動状況

本出張では、日本語隊員とマレーシア人日本語教師が配属されているRS 8校を訪問した。各校では、学校長との面談（うち2校は都合により教頭面談）と授業見学（計21コマ。うち隊員の授業10コマ、ローカル教師の授業11コマ。）を行った。本報告は、日本語隊員のおかれている現状とその活動状況を、出張に先立って実施した隊員とローカル教師に対するアンケート、隊員配属校訪問時の学校長他との面談、授業見学等から得られた情報を踏まえて、まとめたものである。

(1) 訪問校について

まず、出張時（平成8年9月現在）の訪問校8校の状況を概観してみると以下の表のようになる。

学校名		教師数		担当コマ数		生徒数				合計
		隊員	ローカル	隊員	ローカル	フォーム1	フォーム2	フォーム3	フォーム4	
SMSAH	共	2	2	24	24	39	54	57	41	191
KMKK	男	2	2	9	15	28	28	43	44	143
STAR	男	3	1	11	10	25	29	21	29	104
SSP	女	2	1	6	0	27	0	0	0	27
SAS	男	2	2	10	24	48	54	43	42	187
KTK	女	2	2	6	18	29	45	49	32	155
SDAR	男	3	1	42	18	48	54	43	42	187
STF	女	3	1	35	18	47	48	59	47	201

1) 日本語教育への理解

面談した学校長は、総じて日本語隊員のこれまでの活動を評価している。隊員と学校長、他の科目の教師たちとのコミュニケーションも良好のようで、「タイ・マレーシア国日本語教師調査団 平成7年4月」で「RSに日本人教師がいることが当たり前のこととして、生徒は無論、教職員からも受け入れられている」と述べられているのと同様の印象を受けた。13年間というRS日本語教育の歴史における蓄積が、隊員の活動及び日本語教育に居心地のいい環境を作り出しているのではないかと考える。また、学校によっては訪日経験のある学校長、教頭の存在もその環境に大きく影響しているだろう。

2) 教授環境について

東南アジアで同様に中等教育レベルの日本語教育を実施している国々と比較するとかなり恵まれていると言える。L1教室、ビデオデッキ、テープレコーダーなどの設備面が完備しているだけでなく、1クラス20名前後のクラスサイズは、効果的な外国語学習をする上で大きな助けとなっている。

日本語科目で使用する教室には、日本や日本語と、生徒との接触を増やす工夫がいたるところに見られる。しかし教室は、本来の機能を活用しているというよりは教室の一つとしての使用が多いようだ。よって、授業形態によっては机や椅子が固定されていることもあり、必ずしも日本語学習のための効率的な施設とはなっていない場合もある。

日本語教育関連の教師用執務用図書数はかなり充実している。そのほとんどは、国際交流基金が海外の日本語教育支援の一つとして毎年実施している教材寄贈によっている。ただし、中等教育向けの教材等は必ずしも充分とは言えない。

(2) 隊員の活動状況

1996年までに派遣された教師数は、現在派遣中の22名も含め91名にものぼる。JOCVから派遣される日本人教師のみで支えられてきたRSでの日本語教育は、1995年から新しい時代に入った。これは、ローカル日本語教師養成のためにマレーシア政府が実施している研修プログラム(期間5年半で、内訳は半年のマレーシアでの日本語予備教育、来日後の1年の日本語予備教育と4年生大学日本語教育選考)の修了者が日本語教師としてRSに配属されるようになったからである。初年度は2名、1996年度は11名で、今回の訪問校にはすべて1~2名のローカル教師が配属されている。

現在派遣されている隊員には、マレーシア人教師を迎えて、これまでとは違った新しい環境に配慮した活動が求められている。

1) 日本語授業

日本語科目履修希望者は毎年かなり多いようである。履修に際しては、基本的には生徒の希望を受け入れる形をとっているが、外国語学習上の適正人数への調整を行っている学校もある。具体的には、日本語ガイダンスの際に日本語学習の大変さをアピールしたり、テストを行ったりしている。

授業は、RS全体の共通シラバス、カリキュラムで動いている。授業は、1コマ単位ごとのものと2コマ続きのものがあ、学校間で違いがある。この時間割の違いは、他の科目とのカリキュラム調整上の都合による。2コマ続きの授業といっても1コマ40分、移動時間のない時間割では生徒が全員教室にそろそろまで10分弱かかるときもあるので、正味70分。生徒が集中してられない時間ではない。今回見学した授業では、2コマ続きの授業の方がいろいろと工夫した教室活動を取り入れやすく、授業としてのまとまりがあるような気がした。

授業見学は、可能な限りすべての教師の授業で行った。見学授業は、ビデオ録画し、見学者(坪山)のコメントをつけることで本人へのフィードバックとした。

2) マレーシア人教師と日本人教師のチームワークについて

日本人教師主導からマレーシア人教師主導への移行期であり、両者がお互いの場所を模索中の状態が現在のRSであろう。授業デザインに配慮した体系的なチームティーチングは実施されていない。ただし、授業計画を練る際に、お互いの授業アイディアの交換をしたり、相談したりは個別には行われているようである。しかしながら、それも各校の日本語科目全体を見通して授業計画を練るところまでは至っていない。日本語のネイティブ教師、ノンネイティブ教師の特性に配慮したチームティーチングなどはこれからのことであろう。

マレーシア人教師の赴任当初、隊員とマレーシア人教師間で授業見学をしたところもある

ようだ。しかし、授業見学を授業監督と捕らえるような傾向や意識がマイナスとなり、日本語教師であるお互いを知るための有効な手段とはなっていない。マレーシア人教師間の授業見学はまったくないようだ。

3) 教科書改訂作業

これまでの教科書のマイナーチェンジの形で改訂作業が行われている。全面的なシラバス改訂までは考えていない。現在見直し、改訂作業中である。日々の授業をこなしながら教科書改訂作業を行うのは、かなり大変なようであるが、マレーシア人教師が入ることによって隊員側に余力があることは幸いしているのではないだろうか。改訂にあたっては、教科書の使用経験があるだけでなく、日本語学習経験者であるマレーシア人教師の提案、意見を積極的に迎え、参考にしていくことによってよりRSの生徒に配慮した教科書に改訂されていくことが期待される。

4) RSでの授業外活動

RSの生徒が実際に日本語に触れられる機会を可能な限り増やそうとの努力がどの学校でも見られた。具体的には、マレーシアへ進出している企業、日本人学校、日本人会、日本の高校との交流など、日本語学習に効果的な課外活動をコーディネートし、文通、訪問、懇談などの形で実施している。

(3) 今後の課題

隊員の活動状況の観察、アンケート結果分析などから散見できる今後の課題を以下にまとめる。

1) 日本式からマレーシア式への移行

RSで日本語教育が開始されてからマレーシア人教師が赴任するまでの10年強の間、RSでの日本語教育のすべてが日本人主導で進められてきた。よい意味でも悪い意味でも隊員がまとまっていたからか個々の隊員が2年ごとに交代しても基本的なところはほぼ継承されてきていた。そして、隊員間で共通の認識を持ち、各校間の差異が生じにくいように配慮されてきた。これを日本式というならば、教科書作成、共通テストなど全隊員が協力して進めてきたプロジェクトでは、日本式が特に顕著であるかもしれない。そして、この日本式故に2年ごとに隊員の顔が変わっても年度を越えたプロジェクトの成果が確実にあげられたのも事実であろう。

しかしながら、今後は、一国の学校教育の本来の姿に戻ってマレーシア人教師が教えることを前提として日本語教育全体の枠組みが構築されるべきであり、各校における日本語教育の位置づけも決定されていくべきであると考ええる。マレーシアなりの日本語教育を構築していく過程で、これまでの隊員の活動成果は貢献するであろうが、その活動成果を生かすか否か、どう生かすかの判断はマレーシアで日本語教育に関わっている人々(各校のマレーシア人教師だけでなく教育省関係者も含む)に任されるものであろう。外国人である隊員がその構築の過程をゆがめるような働きをするべきではないし、構築の速さを操作すべきでもない。マレーシア人教師と隊員が、お互いの考え方、教え方を尊重、理解する努力を惜しまないこと、対象としているのは同じ学習者であることを忘れないことが、日本式からマレーシア式へスムーズな移行の助けとなるのではないだろうか。

2) 学校間の連携

RSにおける日本語教育が拡大するにつれて、その地域的な広がりや学校間の連携、共同活動をする上で問題となってくる。たとえば、西マレーシアと東マレーシアでは、教師会議、日本文化の日の開催においてもこれまでとは違った対応が必要となってくる。教育省学校局担当官が述べているように経済的な手当での必要性も生じてくる。

隊員は××レジデンシャル・スクールの教師として学校を活動の場としていると同時にJOCVの日本語隊員として横のつながりを持っている。これまで隊員が各校にいることによって学校間の連携が取り易かったのは事実であり、学校を越えた共同活動をしてきた。しかし、公立学校の正規の教師であるマレーシア人教師を迎えた現在、これまでと同様の学校間の連携を取るかどうか、取れるかどうかは再考する必要があるだろう。そして、マレーシア人教師が学校間の連携をどう考えるか、また、教育省の方針が今後の形に影響してくるであろう。

現在は、教育省学校局とクアラルンプール事務所の関係、事務所と隊員の関係、隊員と所属校の関係、ローカル教師と教育省学校局の関係が複雑にからみあっていて、そのどれが優先されるのかいちがいには日本人とマレーシア人教師だけで解決できる問題ではなくなっている。RSの日本語教育にかかわっている人々が機能的に働けるようにシステムを構築することが急務である。

3) マレーシア人教師との棲みわけ及び協力関係の確立

協力関係をどう確率していくかを模索する上では、まず学校側、マレーシア人教師側の期待が何であるかを認識する必要がある。学校長との面談において、「ローカル教師が配属されて以後の日本人教師にはどんなことを期待しますか。」と尋ねてみた。答えは、一様に「ローカル教師への文化的、言語的刺激、日本からの新鮮な情報の獲得を期待している。」とのことであった。また、マレーシア人教師へのアンケートのうち「日本語を教える上で困っていること」「日本人教師といっしょに教えるときの問題点」「マレーシア人教師自身がした方がいいと思っていること」「日本人教師に期待すること」の質問に対する回答から読み取れることは大いに参考になると思える。

マレーシア人教師と隊員との協力関係がはっきりと変わるのは、マレーシア人教師の赴任以前に派遣された隊員が全員帰国してからではないかと想像する。ただ、すべてのRSでマレーシア人教師が隊員の先輩となっても、マレーシア人教師と隊員間の協力関係はその学校の日本語教育によって様々であり、すべての学校に共通する「こうするべきだ。」「こうあるべきだ。」といった棲みわけ、協力関係を提言することはできないのではないと思う。隊員は、マレーシア人教師を理解した上で、ともに試行錯誤をしながらよい協力関係を作り上げていってほしい。

隊員ならではの協力活動として今後も続けていってほしいことがいくつかある。一つは、学習動機の強化のためのネイティブ話者としての役割である。マレーシア人教師が隊員と流暢な日本語で話している姿を生徒が見ることは生徒の学習強化につながる。また、生徒は幸いにして4年間の学習期間に複数の日本人教師と出会え、様々な視点で様々な言葉で日本を知る機会を与えられる。隊員自身が生徒への刺激となることは、忘れないでもらいたい。もう一つは、学習環境を広げることである。海外において唯一日本語使用が保証されているのは授業が行われている教室である。海外で日本語を教える際には、教室外で現実のコミュニ

を積極的に行っているが、そういった外への窓口を開き、定着させておくことは、引き続き積極的にしてほしい活動である。それは、今後たとえ隊員派遣がなくなったとしてもマレーシア人教師の助けとなるであろう。

最後に、チームティーチングに関して触れておく。教育省学校局担当官は、日本語教師会議において隊員とマレーシア人教師とのチームティーチングを奨励していた。その目的は、マレーシア人教師の日本語維持であり、教授技能の向上である。チームティーチングの一形態として隊員とマレーシア人教師がチームティーチングを試行する意味は、今後の派遣計画を考える上でも大きい。現場の教師は、自分の学校に合った教授形態を模索するためにもチームティーチングに前向きに取り組んでほしい。

(4) まとめ

RSの日本語教育はもうJOCVの手を離れかけているのではないかという印象を受けた。RSの日本語教育は自立しようとしているのではないだろうか。だからといって日本人の必要性がないとは言えない。しかし、今まで継続的に送ってきた隊員派遣がその自立の助けになるのかどうかは考察が必要である。1984年に日本語教育が始まり、マレーシア政府による教師養成が始まるまで、そして、その養成期間を終えてローカル教師が赴任するまで、ほぼ5年ごとに変化がある。隊員の派遣も、1校1人で始まり、シニアの派遣、シニアの派遣中断と変化し、再び1校1人になろうとしている。これからの5年は協力隊が今後どうRSに関わりを持っていくのかを模索する5年となるであろう。

今後RSの日本語教育へ派遣される可能性のある教師のタイプには、

- ①1校1人体制になったとき、継続校に派遣される教師、
- ②新設校に派遣される教師、
- ③近隣の複数校を担当する教師、
- ④中等教育アドバイザー

の大きく4つが考えられる。このうち、①、③に求められる資質は類似しているが、②、④ではRSを熟知していること、さらに④は中等教育での十分な経験と知識が①、③に求められる資質に追加される。では、その人材を協力隊は発掘できるのであろうか。人材発掘のための具体的な施策として、

- ①要請背景の正確な把握、
- ②補完研修、派遣前訓練の充実、
- ③約90名いるRS隊員OB・OGの活用

がある。特に、RSOB・OGの中で協力隊以後もさまざまな形で日本語教育に携わっている人がかなりいる。それらOB・OGを活用することはこれまで積極的に考えられてこなかったが、検討に値するのではないだろうか。

マレーシア人教師が育ったということは、協力隊が実施してきたRS日本語教育という長期プロジェクトの大きな成果である。成果がはっきりと目に見えるようになった今、これまでしてきた協力活動をどう現地化しマレーシア人教師に受け継いでいくかは、協力隊が実施している協力活動の開始から終結までのノウハウを問うことにもつながる。

アンケート結果

アンケートは、出張に先立って訪問校所属の日本語隊員とマレーシア人教師に配布し、学校訪問時に回収した。アンケートは自由記述方式を取っている。以下はその集計である。

数字は、同種の回答をした人数、隊員のアンケート結果にある★はローカル教師赴任前に派遣された隊員の回答数、☆はローカル教師赴任後に派遣された隊員の回答数を示している。

隊員に対するアンケート結果（回収率 100%、回答者 20 人）

1 日本語を教える目的は何か。

- ・異文化理解を通して生徒の視野や関心を広げること。★ 8 ☆ 5
- ・日本、日本語を知るきっかけ／興味関心の育成。★ 2 ☆ 4
- ・他文化理解、自文化への認識を深める。★ 2
- ・日本人に見習うべき道德観を体得すること。★ 2 ☆ 1
- ・生徒の成長の一助となること。☆ 3
- ・日本留学への動機付け／日本留学。★ 2
- ・教養としての日本語の基礎的能力の習得。★ 1 ☆ 1
- ・学習方法の体得。☆ 1
- ・回答なし。★ 1

2 日本語を教えている上でかかえている問題点は何か。

- ・英語、マレー語力の不足。☆ 4
- ・生徒の興味を維持すること。☆ 2
- ・副教材の不足。★ 2
- ・学校行事が多すぎる／突然入る。★ 2
- ・授業時間が午後にあること。★ 2
- ・隊員間、またはローカル教師との人間関係。★ 2
- ・日本人とローカルの役割分担。☆ 2
- ・私立化の問題。★ 1 ☆ 1
- ・教案作り、採点に時間がかかる。★ 1
- ・授業準備の時間が十分にとれない。★ 1
- ・生徒の学習態度。★ 1
- ・クラスコントロール。★ 1
- ・視聴覚設備の使いにくさ。☆ 1
- ・日本語の部屋がないため常設展示ができない。☆ 1
- ・4年生までを見通した指導ができない。（新設校）☆ 1
- ・ローカル教師の配属連絡が遅く、カリキュラムが立て難いこと。☆ 1
- ・学校側との教材費などに関する交渉。★ 1
- ・これまでの隊員活動を今後どう踏襲していくか。★ 1
- ・他校の状況を知る機会がとれない。★ 1
- ・歴代隊員の知恵、遺産のシェアがなく、その姿勢もない。☆ 1

- 3 ローカル教師を受け入れてからのプラス面は何か。
- ・学校側との交渉がやりやすくなった。★4 ☆1
 - ・教授法、クラス運営、マレー語の言い回し、マレーの文化習慣などをローカル教師から学べる。★2 ☆3
 - ・学校内情報が得やすくなった。★3
 - ・生徒が共通語がないことによる言い訳ができなくなった。★2
 - ・日本語としての予算がもらえるようになった。★1 ☆1
 - ・授業以外の学校業務の軽減。★1
 - ・日本語科目と他の科目との垣根がなくなり以前よりオープンになった。☆1
 - ・生徒の学習意欲の向上。★1
- 4 ローカル教師といっしょに教える上での問題点は何か。
- ・授業への取り組み姿勢、考え方、業務の遂行の仕方の違い。★2 ☆2
 - ・ローカル教師の日本語力。また、それにどう対応するか。★2 ☆1
 - ・ローカル教師は、時間外労働ができず、授業後の補習などが無理。★2
 - ・ローカル教師との人間関係。★1 ☆1
 - ・授業見学による確執。★1 ☆1
 - ・媒介語をもたない日本人に生徒が拒否反応を示す。★1 ☆1
 - ・ローカル教師の発音、表記などの細かいミス。
 - ・ローカル教師は日本文化についての知識が乏しい。★1
 - ・ローカル教師による文法などのマレー語の説明が正しいかどうかわからない。☆1
 - ・ローカル教師が日本人教師に頼り切ってしまう。★1
 - ・ティームティーチング体制がとりにくい。★1
 - ・クラス別に担当しているので、クラス間のやり方の差が従来より大きくなる。☆1
 - ・ローカル教師主体の態勢をどう考えたらいいのか。☆1
 - ・学校側との交渉を嫌がること。★1
 - ・生徒の日本語使用が減り、容易なマレー語になりがち。☆1
 - ・特にない。☆1
- 5 ローカル教師といっしょに教えるときの利点は何か。
- ・生徒が質問しやすく、マレー語の説明、回答を得られる。★2 ☆3
 - ・マレーシア人の習慣を考慮して生徒を指導できる／生徒指導が行き届く。★3 ☆1
 - ・生徒に適した指導法、説明の仕方をローカル教師から学べる。★2 ☆1
 - ・生徒一人一人のより詳細な情報（生活面、学習面）を入手できる。★2
 - ・生徒が言語や文化を理由にした言い訳ができなくなった。☆2
 - ・マレーシア人から見た日本を生徒に伝えられる。★2
 - ・学校書類（マレー語）の作成が容易になった／事務作業がスムーズ。★1 ☆1
 - ・教師間でのコミュニケーションが密になる。☆2
 - ・マレーシア的考え方を知ることができる。★1 ☆1
 - ・ノンネイティブの視点をシラバス、教材に反映できる。★1

- ・日本語の活動の幅が広がる。☆1
- ・学校での日本語への理解が深まった。★1
- ・日本人が気づかないことを教えてくれる。★1
- ・お互いの弱点をカバーし合える。★1
- ・日本語学習経験者としての考えを聞ける。☆1
- ・日本語や日本文化を客観的に見る目を得られる。☆1
- ・日本について日本人、マレーシア人両方の視点から情報を得られる。☆1
- ・ネイティブがノンネイティブに教える時の問題点が明らかになる。☆1

6 ローカル教師に期待することは何か。

- ・ローカル教師間の連携を持って、マレーシアの日本語教育をリードしてほしい。★3 ☆3
- ・自己研鑽に励むこと。★1 ☆1
- ・日本人教師が不得手とすることをカバーして行ってほしい。☆2
- ・経験を生かして、自分なりのやり方で授業をして行ってほしい。★2
- ・隊員との対話をもっと多く持ってほしい。★1
- ・効果的な学習法など隊員に教えてほしい。★1
- ・日本人にどんどん尋ねてきてほしい。★1
- ・生徒のしつけ方を教えてほしい。☆1
- ・隊員が築き上げてきたものを大切にしてほしい。★1
- ・ターゲット言語を使用する雰囲気クラスの中に作ってほしい。★1
- ・長い目で生徒の成長、指導の成果を見てほしい。☆1
- ・日本からの来訪者の通訳などをして、架け橋となってほしい。☆1
- ・立身出世ではなく、自己の成功と教育理想の実現が一致すること。☆1
- ・教師自身が生き生きと日本語世界に関わっていくこと。☆1

7 これからの日本人教師の役割は何か。

- ・ローカル教師の日本語力を上げる、維持するために激励する。★4 ☆3
- ・生きた日本語を直接生徒に聞かせる。★3 ☆2
- ・日本人の文化や習慣を紹介する。★2 ☆1
- ・日本、日本語の広報として日本人のモデルとなる。★2 ☆1
- ・アシスタントティーチャー＋アドバイザー。★2
- ・新しい教授法、工夫された教材などをローカル教師に伝える。★1 ☆1
- ・テスト作成、教材作成。★1 ☆1
- ・生徒への発音指導。☆2
- ・授業をする。★1
- ・会話練習などプラクティカルな授業を受け持つ。☆1
- ・生徒の言語運用能力を高めること。☆1
- ・自然な日本語を生徒に教えること。☆1
- ・生徒が今までとは違う新しい視点で物事を見られるように指導する。☆1
- ・チームティーチングの相手。★1
- ・ローカル教師が仕事をしやすいように動く。(授業研究材料の提供など) ☆1

- 8 今後赴任する日本語隊員に必要なことは何か。
- ・ローカル教師とうまくやっていくための協調性。★6 ☆3
 - ・日本語教授法、日本の文化、行事、習慣などの知識を有すること。★4 ☆2
 - ・日本語を教えた経験（含む年少者）があること。★3 ☆2
 - ・マレー語力。★1 ☆3
 - ・授業研究への熱心さ。☆2
 - ・けじめがあり、勤勉なこと。★1 ☆1
 - ・シニア隊員レベルの日本語教授経験と語学力。（ローカルに対応するにはジュニアでは無理）★1
 - ・子どもを愛せること。☆1
 - ・やる気と前向きな姿勢。☆1
 - ・柔軟な発想。★1
 - ・クラスコントロール技術。★1
 - ・事務処理能力。☆1
 - ・組織の一員として働く社会人としての責任感、折衝能力。★1
 - ・業務計画を現状に合わせて立てられること。★1
 - ・ローカル教師への日本語指導力。★1
 - ・現在の形での派遣は必要ない。（但し、ALTまたはローカル教師研修のための教師が考えられる。）★1 ☆1
- 9 活動期間中、情報入手しにくいものは何か。
- ・特にない。★5 ☆1
 - ・新しい教材についての情報。（楽しく勉強できるゲーム集など）★2 ☆1
 - ・英日辞書またはマ日辞書の入手。★1
 - ・日本からの来訪者（JICAを通さないもの）の情報。☆1
 - ・日本語関連行事の連絡の遅延。★1
 - ・ローカル教師の配置に関する情報。★1
 - ・他校の状況。★1
 - ・地域の日本人団体の有無とその活動状況。★1
 - ・語学力の低さからくる学校連絡情報の入手の困難さ。☆1
 - ・歴代隊員の遺産（まちがいやすいこと、教える上での注意点など）☆1
 - ・帰国後の就職情報。★1
- 10 今後必要となると思われる教授上の知識、情報は何か。
- ・ティームティーチングについての知識、情報。★3 ☆1
 - ・日本語教授法の知識。（コミュニケーション教育、漢字指導など）★1 ☆1
 - ・日本の文化（地域の特色、伝統文化など）について。☆1
 - ・クラスコントロールに関する技術。★1
 - ・生徒の自由発話の機会を増やす工夫。★1
 - ・課外活動の運営方法など。★1

- ・日本人中高生との交流に関する情報。★1
- ・日本訪問の機会を得るイベントに関する情報。★1
- ・日本語能力試験対策のための知識、情報。☆1
- ・ローカル教師のレベルを維持し、いろいろな疑問に答えられるだけの力量。★1
- ・近郊でのセミナーの開催。(楽しい授業のためのアイディア、効果的な練習方法) ★1
- ・マレーシアにある他機関(JLCなど)の利用に関する情報。☆1

11 近隣に在住する日本人とRSの日本語教育の助けとなるような接触があるか。

- ・他の職種の隊員の訪問(STAR, KTK)
- ・日本企業訪問(STAR, KMKK)
- ・日本人学校との毎年の交流。(SMSAH, SAS)
- ・日本からの訪問者(SAS)
- ・姉妹校との交流(SAS)
- ・日本人会との接触(STF)
- ・なし(SDAR, SSP)

ローカル教師に対するアンケート結果（回収率100%、回答者10人）

1 日本語を教える目的は何か。

- ・第3言語の学習／日本語の紹介／外国語への興味、知識の獲得。 8
- ・日本文化、日本事情、日本人の思考の紹介と理解。 8
- ・日本留学のため。（後に、マレーシア社会に貢献すること） 2
- ・日本に興味を持たせること。
- ・生徒に、より多くの選択肢を与えること。

2 日本語を教える上で困っていることは何か。

- ・発音。 4
- ・生徒にまじめに勉強させること／生徒の興味を維持すること。 2
- ・参考書、教具の不足。 2
- ・問題の作成。
- ・文法。
- ・作文添削。
- ・日本語教師会議などの頻繁さ。
- ・回答なし。 2

3 日本語能力の維持、向上のため努力していることは何か。

- ・日本人教師、周りにいる日本人と話す／日本語をできるだけ使う。 7
- ・日本語の本、雑誌、新聞、参考書を読む。 7
- ・日本の番組（ビデオ）を見る。 2
- ・日本の友達との文通。
- ・日本語能力試験を受ける。

4 教える上で自信のあること、自分に欠けていると思うことは何か。

自信のあること：・文法の教え方。 3

・クラスコントロール。 2

・アクセント。

・日本語の何がむずかしいかを学習者の立場でわかっていること。

・生徒の母語で説明できるので、生徒の不安を取り除くことができること。

・いろいろな先生に日本語を習ったことから、どんな教え方が効果的かわかる。

欠けていること：・発音。 3

・アクセント。 3

・語彙量。

・漢字。

- 5 日本語を教える前に教えていた科目の教授経験はどう役立っているか。
- ・クラスコントロール。 4
 - ・教授方法が応用できること。 2
 - ・5年間のブランクに関係なくすぐ職場に溶け込めた。
 - ・ない。英語の教授経験(5年間)はあるが、表記の違いが大きくまったく応用できない。
- 6 日本人教師といっしょに教えるときの問題点は何か。
- ・日本人の考え方は保守的で柔軟性にかける。(別のやり方、提案を聞いてくれない) 3
 - ・なんでも全員でやるという物事の進め方。
 - ・お互いの理解への不足。
 - ・ローカル教師への要求の高さ。(日本人の英語の先生のように考えてほしい)
 - ・人間関係。
 - ・生徒の規律の管理。(日本人は甘い)
 - ・回答なし。 6
- 7 ローカル教師がした方がいいことは何か。
- ・マレー語または英語による説明。(語彙、絵と身振りで説明できないこと、文法など) 9
 - ・日本、日本人に関する話。
 - ・ゲームのやり方や指示。
 - ・回答なし。 2
- 8 日本人教師に期待することは何か。
- ・お互いに尊敬し、協力して仕事ができること。 2
 - ・マレーシアの文化を理解し、受け入れる心の広さ。
 - ・ローカル教師の気持ちを理解してくれること。
 - ・教育省の政策を理解してくれること。
 - ・日本語会話の相手。
 - ・発話の間違いの訂正。
 - ・教え方の指導。
 - ・日本語教育に関する専門知識を有すること。 2
 - ・留学生に教えた経験があること。
 - ・英語かマレー語のどちらかができること。
 - ・回答なし。
- 9 日本留学でのいちばんの収穫は何か。
- ・日常生活での日本語(日常会話)を知ることができた。 3
 - ・日本の文化(異文化)の理解。 3
 - ・日本人の考え方がわかったこと。 2
 - ・ライフスタイル(日本人の仕事ぶりを含む)を知ることができた。 2
 - ・学んだことすべて。
 - ・日本語を通して、日本、日本人のことをある程度わかるようになった。

- ・日本人の精神（時間厳守、思いやりなど）がわかった。
 - ・日本語、日本人、日本文化を体験的に学べた。
- 10 日本で学んだことはどのように役立っているか。
- ・日本事情、日本文化を具体的に紹介できる。 3
 - ・生徒に自分の知っていることを伝えられる。
 - ・聴解問題を作るとき経験が役立つ。
 - ・初級の教科書を分析した経験から文法に詳しくなっている。
 - ・多くの教科書を見た経験が役立っている。
 - ・日本語の教え方、教えるための基礎的な知識が役立っている。
 - ・どんな教え方がいいか考えるとき役立つ。
 - ・日本語教授法演習で学んだこと。（教案の書き方、いろいろな教授法、教具の使い方、誤用訂正など）
 - ・日本文化の教え方。
 - ・生徒に対する指導の仕方。
 - ・前向きに考えられる。
- 11 日本語教授に必要なのに日本で学べなかったことは何か。
- ・日本語の教師となるための勉強。 2
 - ・漢字の教え方。 2
 - ・日本語をどう教えるか。
 - ・授業中におきるさまざまな問題に対する対処法。
 - ・教授実習。
- 12 今使っている教科書はどうか。
- ・辞書形の導入を早くしたい。 2
 - ・文型がたりない。（可能形の追加）
 - ・あまり必要のない語彙をはずした方がよい。
 - ・新しいことばの例文がない。
 - ・生徒の興味のある読み物が少ない。
 - ・文法練習が少ない。
 - ・索引の説明が必要。
 - ・日本語能力試験に合わせて教科書のシラバスをチェックしたい。
 - ・回答なし。 2
- 13 あなたにとって使いやすい教科書はどんな教科書か。
- ・にほんごこんにちば 3
 - ・国際学友会の教科書（文法項目がスムーズに学習できる提出順の教科書） 2
 - ・新日本語の基礎（ドリルがたくさんある）
 - ・特になし。 3

マレーシアの日本語教育の現状

1996年08月01日現在

学 校 名	住 所	生徒数	下 段 : 校長名	第 2 外国語	JOCV	Malaysian
Sekolah Menengah Sultan Abdul Halim	06000 Jitra, Kedah Tel. 04-7143209 Fax. 04-7143215	共学校 618 Haji Md. Yusoff bin Othman	1972年創立 1984年 8月開始	7977語82 日本語84 7977語89	高 彦 孝 (~97.07.02) (~98.04.08)	Ainun Noziah Abdul Rahman 95 Cheng Siak Thiam 96
Kolej Melayu Kuala Kangsar	32000 Kuala Kangsar Perak Tel. 05-7761400 Fax. 05-7764500	男子校 644 Haji Baharom Kamari	1965年創立 1984年 1月開始	7977語82 日本語84 7977語89 * 中国語94	川上 晋子 (~96.12.04) (~98.07.08)	Ainon Juriah Bt. Abdul Malek 95 Saliyid Radzuwan Syed Sopi 96
Sekolah Tuanku Abdul Rahman	Jalan Sultan Azlan Shah 31400 Ipoh, Perak Tel. 05-5457733 Fax. 05-5457000	男子校 684 En. Dava @ Dewa bin Abdullah	1953年創立 1984年 8月開始	7977語82 日本語84 * 中国語92 7977語95	松本 純子 (~96.12.04) (~98.07.08)	Lee Sau Lan 95
Sekolah Alam Shah	Jalan Tenteram Bandar Tun Razak 58000 Kuala Lumpur Tel. 03-9318393 Fax. 03-9318119	男子校 656 Haji Mohammed Zon bin Ramli	1953年創立 1984年 8月開始	7977語82 日本語84 7977語95	上原 愛子 (~97.07.10) (~98.07.08)	William Lowe 96 Sharifah Zarina Syed Zakaria 96
Kolej Tunku Kursiah	Jalan Tunku Kursiah 70400 Seremban Negeri Sembilan Tel. 06-7623351 Fax. 06-7619906	女子校 605 Hajah Yunidzar binti Mohd. Zain	1947年創立 1984年 1月開始	7977語82 日本語84 * 中国語95 * 仏語 84	三浦 恵美子 (~97.04.03) (~97.07.03)	Soh Soo Guat 96 Tsi Nyuk Lian 96
Sekolah Tun Fatimah	Jalan Tun Abdul Razak 80000 Johor Bahru Johor Tel. 07-2354706 Fax. 07-2376361	女子校 666 Hjh. Morni bt Karto	1957年創立 1984年 8月開始	7977語82 日本語84 7977語87	佐藤 郁子 (~97.07.09) (~97.12.03) (~98.07.08)	Teo Sok Eng 96
Sekolah Menengah Sains Tengku Muhammad Faris Petra	16100 Pengkalan Chepa Kelantan Tel. 09-7738277 Fax. 09-7739139	共学校 740 Hj. Sidi Omar b. Mat Jusoh	1973年創立 1982年 12月開始	7977語82 * 中国語88 日本語92	森永 昭彦 (~96.08.10) (~96.12.04) (~98.07.08)	
Sekolah Datuk Abdul Razak	Jalan Sikamat 70400 Seremban Negeri Sembilan Tel. 06-7625681 Fax. 06-7625681	男子校 681 Haji Jalil bin Morah	1957年創立 1982年 12月開始	7977語82 日本語84 7977語95	三原 雅子 (~96.12.04) (~97.07.09) (~98.07.08)	Zubaidah bt. Ali 96
Sekolah Seri Puteri	Jalan Kolam Ayer 51200 Kuala Lumpur Tel. 03-4411715 Fax. 03-4428228	女子校 487 Hjh. Aminah bt Ahmad	1988年創立 1989年 12月開始	7977語82 7977語84 日本語95	伊藤 愛子 (~96.12.05) (~98.07.08)	Saadiah bt. Hj. Harun 96

1996年10月01日

Sekolah Menengah Sains Miri	Jalan Dakam 98000 Miri Sarawak Tel. 085-831371 Fax. 085-831030	共学校 1991年創立 1997年1月開始 Mohd. Baharin bin Harun	7977第91 日本誌97	島田那子	(~97.12.03)	Teo Pek Goh	96
Sekolah Menengah Sains Kuching	Jalan Batu Kawa Off Jalan Matang 93050 Kuching, Sarawak Tel. 082-642544 Fax. 082-642710	共学校 1994年創立 1997年1月開始 Mortadza bin Hj. Alop	7977第94 日本誌97	上越坂朗子	(~97.07.10)		
Sekolah Menengah Sains Sultan Haji Ahmad Shah (SENSAS)	Km. 12 Jalan Gambang 250250 Kuantan Pahang Tel. 09-5381223 Fax. 09-5381223	共学校 598 1972年創立 1997年1月開始 Haji Mohd. Hassan bin Ismail	7977第92 第95 日本誌97	本田紀子	(~97.07.09)		
Sekolah Menengah Sains Sultan Mahmud (SESMA)	21300 Kuala Terengganu Terengganu Tel. 09-6664214 Fax. 09-6664644	共学校 Hj. Abdul Hadi bin Hj. Tahir 19 年創立 1997年1月開始	7977第92 第93 日本誌97	山上りえ	(~96.12.04)		

日本基督教団師範教員及びローカル教師師範教員配置計画表（案）

平成8年9月 8日

	1996 (平成8年) 4月	7月	12月	1997 (平成9年) 4月	7月	12月	1998 (平成10年) 4月	7月	12月
1. SMSAH JIRA	(ローカル教師2名+隊員2名) → (ローカル2名+隊員1名) ローカル教師 (1995年4月帰国) ローカル教師 (1996年4月帰国) 新出逸子 (7/3) 十倉 栄 (7/1) (平成9年秋募集隊員要請・9/3)								
2. XMKX K. KANSAR	→ (ローカル教師2名+隊員1名) ローカル教師 (1996年4月帰国) ローカル教師 (1996年4月帰国) 川上 虎子 (6/2) 島田 那子 (7/2) ※ 17月16日より2月間STF校で活動を行いその後、10月1日より新設校 S.M.I.K.A.K.へ任地変更予定 (平成9年秋募集隊員要請・10/1)								
3. STAR IPOH	→ (ローカル1名+隊員1名) ローカル教師 (1995年4月帰国) 松本 純子 (6/2) 仲 連代 (6/2) 金子 雄大 (8/1) (平成9年秋募集隊員要請・10/1)								
4. SAS K. LUMPUR	→ (ローカル教師2名+隊員1名) ローカル教師 (1996年4月帰国) ローカル教師 (1996年4月帰国) 上坂 淑明子 (6/1) 久保 広高 (6/2) 山田 勇人 (8/1) (平成9年秋募集隊員要請・10/1)								
	1996 (平成8年) 4月	7月	12月	1997 (平成9年) 4月	7月	12月	1998 (平成10年) 4月	7月	12月

	1996 (平成8年) 4月	7月	12月	1997 (平成9年) 4月	7月	12月	1998 (平成10年) 4月	7月	12月
5. KTK SERBAN	ローカル教師 (1996年4月帰国) → (ローカル教師2名+隊員1名) ローカル教師 (1996年4月帰国) 移動の可能性有り 三宅直子 (5/3) 山田裕美子 (7/1) 平田こころ (8/2) (平成9年秋募集隊員要請・10/2)								
6. STF JOHOR B.	ローカル教師 (1996年4月帰国) → (ローカル教師1名+隊員2名) 佐藤利枝 (7/1) 香野英晴 (7/2) 任期短縮 越石一英 (8/1) (平成8年秋募集隊員要請・9/1) (平成9年秋募集隊員要請・10/1)								
7. SDAR SERBAN	ローカル教師 (1996年4月帰国) → (ローカル教師1名+隊員1名) 三原環子 (6/2) 本田紀子 (7/1) (9月30日まで) その後、新設校 SESIA 7777 へ任地変更予定 藤江希子 (8/1) (平成9年秋募集隊員要請・10/1)								
8. SMSTMFP KOTA BARU	山永留彦 (6/1) 山よりえ (6/2) 中村香織 (8/1) 松井陽子 (8/2) (平成9年秋募集隊員要請・10/1)								
9. SSP K LUMPUR	ローカル教師 (1996年4月帰国) → (ローカル教師1名+隊員1名) 伊藤環子 (5/2) 田村由美恵 (8/1) (平成9年秋募集隊員要請・10/1)								
	1996 (平成8年) 4月	7月	12月	1997 (平成9年) 4月	7月	12月	1998 (平成10年) 4月	7月	12月

	1996 (平成8年) 4月	7月	12月	1997 (平成9年) 4月	7月	12月	1998 (平成10年) 4月	7月	12月
10. SEMSAS KUANTAN				SDARから移動(10月1日) 本田結子(7/1) (渡辺和子・8/3)					
11. SESMA TERENGGANU				1延長1年・SMSTMFPから移動 山上り入(6/2) (平成8年秋募集要員要請・9/1)					
12. SMS KUCHING				1延長1年・SASから移動(10月1日) 上城安昭子(6/1) (平成8年秋募集要員要請・9/1)					
13. SMS MIRI				ロ-カル教師(1996年4月帰国) STEから移動 高田郁子(7/2) (平成9年春募集要員要請・9/2)					
	1996 (平成8年) 4月	7月	12月	1997 (平成9年) 4月	7月	12月	1998 (平成10年) 4月	7月	12月

JOCV MALAYSIA

日本語教師 隊員配置図 (西マレーシア) 1996年12月10日現在

◦Kuala Kangsar
6/2 川上 晃子 (日本語教師)
8/1 南澤 英夫 (日本語教師)

◦Ipoh

8/1 金子 雄大 (日本語教師)

◦Kuala Lumpur

8/1 田村 由美恵 (日本語教師)
8/1 山田 勇人 (日本語教師)

◦Seremban

5/3 三宅 直子 (日本語教師)
7/1 山田裕美子 (日本語教師)
8/1 藤江 希子 (日本語教師)
8/2 半田こころ (日本語教師)

◦Jitra

7/1 十倉 朱 (日本語教師)

7/3 新出 逸子 (日本語教師)

◦Kota Bahru

6/2 山上 リエ (日本語教師)

8/1 中村 香織 (日本語教師)

8/2 櫻井 燭子 (日本語教師)

◦Kuantan

7/1 本田 紀子 (日本語教師)

◦Johor Bahru

7/1 佐藤 邦枝 (日本語教師)

8/1 越石 一美 (日本語教師)

JOCV MALAYSIA

日本語教師 隊員配置図 (東マレーシア) 1996年12月10日現在

◊Kuching 8名
6/1 上飯坂 朗子 (日本語教師) RS

◊Miri 1名
7/2 島田 郁子 (日本語教師) RS

